

伊豆市リトルシニア 全国選抜大会優勝への道のり

平成22年7月26日 2回戦(初戦)・・・西武運動公園

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
福岡中央	0	0	0	0	0			0	3
伊豆市	3	2	0	1	1×			7	9

鈴木、稲持 — 花島

5回コールド

3塁打: 鈴木2

2塁打: 鈴木

<戦評> 初回エラーで出塁の水口を嵩太のセンター前ヒットで返し早くも先制。続く康平のレフト前ヒット、亮のレフトオーバー3塁打で3-0。続く2回には森下のタイムリーで2点を追加。投げては先発亮が4回までヒット2本におさえ得点を許さない。5回には2年生稲持ヘリラー。5回には再び亮の3塁打で7点目と挙げコールド成立。全国大会の初戦を打線の活躍と完封リレーで幸先の良いスタートを切った。

7月27日 3回戦・・・筑豊緑地野球場

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
長崎東	0	0	0	0	0	0	1	1	9
伊豆市	1	0	2	0	0	0	×	3	7

鈴木 — 花島

3塁打: 森下

2塁打: 望月

<戦評> 初回内野安打の森下を2塁に置いて、亮のセンター前ヒットで先制。3回には嵩太ファアホール、森下の3塁打で2点目、さらに亮のショートゴロの間に森下生還し3-0と試合の主導権を握る。その後打線は追加点を奪えなかったが、先発亮は毎回の9安打を許しながら要所を締め、7回の1点に押さえ完投。

7月27日 4回戦・・・筑豊緑地野球場

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
呉中央(広島)	2	0	0	0	0			2	4
伊豆市	5	0	1	2	1×			9	7

遠藤康平 — 花島

5回コールド

本塁打: 鈴木

2塁打: 山崎

<戦評> 初回、先発康平がつかまり、トップバッターに内野安打を許し、続く打者にはランニングツーランを浴び0-2とこの大会初めて先制を許す。しかしその裏相手投手の乱れもあり4四球、ヒット、スクイズなどで一気に5点を挙げ逆転。3回には亮がライトスタンドへホームラン。続く4回には嵩太、亮、勝又のヒットで2点を追加。投げては康平は2回以降1安打で安定したピッチング。好調な打線で9-2の5回コールドでベスト8進出。

7月28日 準々決勝・・・筑豊緑地野球場

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
行橋(福岡)	1	0	0	0	0			1	5
伊豆市	2	0	1	5	×			8	8

水口 — 花島

本塁打: 遠藤康

3塁打: 森下2、遠藤康、水口、遠藤嵩

<戦評> 初回先発水口が内野安打、ヒットなどで先制を許す。しかし、その裏好調な打線が爆発。死球の嵩太を置き、森下の3塁打で同点、続く亮もレフトオーバーの2塁打の長打攻勢で2-1と逆転。3回には嵩太の3塁打に亮のセンター前ヒットで追加点。4回には圭耶の内野安打、水口2塁打、森下のこの日2本目の3塁打、続く康平がレフトオーバーのランニングホームランで一気に5点を加え8-1と大きくリード。水口は2回以降立直り、5安打完投。2試合連続5回コールド勝ち。

7月28日 準決勝・・・筑豊緑地野球場

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
伊豆市	1	1	0	0	0	4	0	6	8
高岡(富山)	1	0	0	2	0	0	1	4	8

稲持 — 花島

3塁打: 遠藤康、鈴木

<戦評> 初回、嵩太、森下のヒットに康平の犠飛で先制。この試合先発は稲持、立上がりツーアウトからエラーのランナーをワイルドピッチで同点を許す。2回にヒットの勝又が盗塁、エラーで生還し、再び2-1とリード。しかし、4回にフォアボール、ヒットのランナーを置き、ツーベースヒットを許し2-3と逆転を許す。6回反撃開始、嵩太のレフト前ヒット、森下バントヒット、ここで康平が左中間3塁打で2点を追加し、4-3と逆転。続く亮がセンターオーバー3塁打に山崎のスライズでこの回一気に4点、6-3とする。投げては稲持が高岡の反撃を最終回の1点に押さえ見事完投。いよいよ決勝進出。

7月29日 決勝・・・筑豊緑地野球場

	1	2	3	4	5	6	7	計	H
伊豆市	0	1	0	1	1	0	0	3	10
青葉緑東	0	0	0	0	0	0	2	2	6

鈴木 — 花島

<戦評> 昨秋のクラシック決勝戦の雪辱なるか。2回、ツーアウトランナーなしから勝又がヒット、勝又を2塁に置いて、山崎がレフト前タイムリーで先制。4回にはセンター前ヒットの康平が盗塁、ワイルドピッチで3塁へ進み、山崎のスライズで2-0。5回にはまたもツーアウトランナーなしから嵩太、森下のヒットに続き、康平がライト前にタイムリーで3-0。6回、7回に好機を迎えるが追加点を奪えず試合は最終回へ・・・。最終回、ワンアウトから連打、フォアボールで一死満塁、ここでツーベースを打たれ3-2でなおも2-3塁で一転して逆転サヨナラのピンチ。これまで、大事な場面で何度となくサヨナラ負けを喫してきた。しかし、ここで亮が三振、セカンドゴロに打取りついに勝利。初出場、初優勝を成し遂げた。チーム設立6年目にしての快挙。

この大会、4日間で6試合とハードな日程だったが、見事に投手陣と打撃陣がかみ合った。投手陣は、初戦の2回戦は大量リードで1イニング継投した以外は5試合完投。実質6試合完投と言える好投でローテーション通りの投手起用でハードなスケジュールを勝ち抜いた。打撃陣は、集中打、ツーアウトからの得点、足を絡めたり、効果的な攻撃で得点を重ねた。この大会の総得点36(一試合平均6)、総失点10(一試合平均1.6)

チーム打率.368

打率上位・・・森下.611、嵩太.533、康平.529、亮.500

